《論　文》

アルチュセールにおける適用理性主義と認識生産の理論

杉　山　吉　弘

はじめに

1990年10月にアルチュセールの葬儀に際して，バリバールはその忌辞おいて，「弁証法の冒険」への出発点となるようなアルチュセールの三つの主要なテーゼを次のように要約している。「認識論的切断が存在する（マルクスにおいて，あるいは他の場所にも）。理論のなかには幾分かの階級闘争が存在する（なぜなら階級闘争は理論の外部に閉じ込められないがゆえに）。国家のイデオロギー諸装置が存在する（国家に最も依存していないように見える『不可視の』諸装置を含めて）。」[1] バリバールによれば，それらのテーゼはいまだ論破されていないという。本論は，〈人間諸科学のエピステモロジー〉を究明するという意図の下でアルチュセールの認識論を検討するものであるから，「認識論的切断」に関する最初のテーゼが主要な論題になる。

そのうえで更に問題を限定してアルチュセールに問いかけ，彼の認識論において不可視なままにとどまっている新たな問題編成を提起したいと思う。というのも，たとえば我が国でもアルチュセールの哲学が衝撃をもって受容されたとはいえ，鈴木一策氏の次のような感慨が支配的なのではないか。「アルチュセールが日本のマルクス主義の思想に刻印したものは何であったのか。彼の死後改めてそう問う時，我々はほとんど答えに窮する。敢えて言えば何が何だかわからぬまに突風の如く我々に襲いかかり，……『資本論』研究の層の厚さを誇る日本の読者を愕然とさせた面があるにはあったが，取りつく島がなかったのが実情ではなかったか。」[2] 大切なのは，鈴木氏自身が試みているように，アルチュセールの「理論」にたいしてその理論的な基本的な問題について理論的に問いかけることである。アルチュセールがマルクスを「徴候的に」読んだように，アルチュセールを理論的に「徴候的に」読めばよい。そのうえ一言付け加えるなら，アルチュセールの認識論に「愕然とさせた面」があったとしても，バシュラールの認識論との関係においてはもちろんのこと，F．ベーコン以来の認識論の伝統から見ても，彼の認識論的企図は決して西欧認識論の本流から逸脱しているわけではない。そのことは，カンギレムやアルチュセールが重視するバシュラールのたとえば「認識論的障害」の概念を，ベーコンのイドラ論と関連づ

けてみるだけでも明らかであって，元来認識論は科学的な認識の生産を推し進める意図に発する批判的な哲学的企図なのである。マルクス主義理論の深化が，いかにアルチュセールにとって緊急かつ重要な当時の課題であったかは，周知の通りである。ただ「愕然とさせた面」があったとすれば，アルチュセールが「歴史の科学」の誕生に伴うまったく新たな認識論的課題と理論的に格闘していたからにほかならない。

ところで，私としては私がアルチュセールの認識論において最も基本的な問題であると考える次の二つの理論的問題を，アルチュセールの科学的認識生産の歴史理論にたいして提起したい。第一に，実在的対象と科学的対象の「認識論的差異」における両者の関連に関する問題であり，第二に，「理論的実践の過程」における理論生産の〈理論〉に関する問題である。

1　実在的対象と科学的対象の「認識論的差異」と認識論的領有のメカニズムの問題編成

両対象の認識論的差異はアルチュセールがその全著作を通して一貫して力説している概念である。しかもその概念は，たとえば『資本論を読む』所収のアルチュセールの論文（「序文，『資本論』からマルクスの哲学へ」，および「『資本論』の対象」）の要をなす基本概念なのである。その概念は次の三つの問題系を含むと考えれらる。第一に，たとえば経験主義的イデオロギーをはじめとする，その差異を曖昧にすることから生まれるもろもろのイデオロギーに対する批判。第二に，それらのイデオロギーとの「切断」において形成される科学的対象の構成の〈理論〉，すなわち科学的認識生産の歴史に関する大文字の〈理論〉。第三に，実在的対象と科学的対象のあいだの関連の認識論的メカニズムについての考察。周知のように，科学的認識の生産の歴史に関する〈理論〉が，『マルクスのために』と『資本論を読む』の時期におけるアルチュセールにとっての「哲学」であった。第三の問題系は，第一の問題系であるイデオロギー批判と同様に，〈理論〉を内在的に構成するはずであるが，アルチュセールの言説では，いわゆる認識生産の歴史的諸条件の理論とは異なる認識論的次元に属するものとして位置づけられている。

第三の問題は次のように定式化される。「認識の対象の生産は，いかなるメカニズムによって，思考の外部に，実在の世界に存在する実在的対象の認識的領有を生産するのか。われわれはまさに一つのメカニズムについて語っており，認識がその認識であるところの実在的対象と区別される自らの対象（認識の対象）にことごとく向けられる認識の種別的実践による世界の領有様式という種別的事実の説明をわれわれに与えるはずのメカニズムについて語っている。まさにここでこそ最大のもろもろの危機が訪れるのである。」[3] この第三の問題は第二のそれと「まったく異なる問題」である。本論ではまずこの問題，すなわちアルチュセールの認識論が論じられるときにほとんどなおざりにされている問題，しかしまさに『資本論を読む』所収のアルチュセールの論考のテーマをなす問題を，主題的に取り上げることにしたい。

1993年11月に刊行された『情況』の「特集・アルチュセールと現代思想」における研究者諸氏

の発言を参照してみよう。坂上孝氏によれば，「アルチュセールはこのように現実の対象と認識の対象を区別し，この区別こそ唯物論的な認識論の条件だと主張しているのですが，しかし先にふれた実在への固執などを見ると，どうも究極のところで両者が一致してしまっているフシがあるように感じられる。よく分かりませんがね。それはともかく……。」「両者が一致」するとはどういう意味なのか。ありえないことである。しかも問題は回避されている。また柳内隆氏によれば，「マルクスにとって，人間は『具体的なもの』という『実在の対象』を決して認識できないのであり，認識しているのは人間の精神の中で自分に都合のよいようにつくりあげた『認識の対象』でしかない。つまり，アルチュセールは『実在の対象』と『認識の対象』とを峻別することによって，『主体と客体の一致』による真理を取り除いたのである。」明らかにアルチュセールにとって認識は「実在的対象」についての認識，すなわちその認識上の領有である。それ以外に考えようがない。柳内氏の言う「自分に都合のよいように」とはいかなる意味なのか。それに柳内氏もまた上述の問題を回避している点では坂上氏と同じである。更に柳内氏はこう述べている。「より『現実的な』理論とは，具体的な実際世界の複雑さや多様性，そして複雑に錯綜した力関係に対応した理論である。」ここで言及されている「対応」とはいかなる認識論的な意味をもつのか。そのことこそ，実在の対象と認識の対象との関係にかかわる上述の問題そのものではないのか。「対応」という言葉による答えがあり，その答えによって問題は不可視なものに後退している。理論的問題のそのような蔑視は，アルチュセールに無縁なイデオロギーをアルチュセールに押しつける結果に終わる。「アルチュセールは，すでに真理を排除していた。……真理から切りはなされた科学は，次の科学の前史となるイデオロギーの別名でしかない。」イデオロギーと科学との差異（認識論的切断）をたえず力説するアルチュセールの思想は，一切をイデオロギーとするその相対主義と真っ向から対立する。科学的理論を「仮説」の概念や「モデル理論」と注意深く区別していたアルチュセールにとって，その種の相対主義を容認することなどできるはずもないのである。

『情況』の次号の同じ特集第二弾での鈴木一策氏はもっと事態を理解しており，議論の仕方も屈折している。鈴木氏はアルチュセールの「断絶論」を論じるに当たって，「実在的対象の認識的領有」（アルチュセール）に関する上述の引用から始める。しかし，次のような注釈は納得しがたい。「……よく考えてみれば，理論的実践を実在世界から切り離しておいて理論的実践の『認識の対象』は実在世界の『実在の対象』といかなるメカニズムで関連しているのかと問うこほど無謀なことはないのでないかと思われてくる。」[4] アルチュセールの確認する「認識論的差異」は科学的認識にかかわる一般的な事実として言及されており，その差異と関連の「無謀」をとがめる鈴木氏の発言は，ほとんどアルチュセール認識論の根幹にかかわる「無謀」な無理解を示していると言えよう。いずれにせよ，実在的対象と認識の対象の差異と関連に関する論者たちの理解は大混乱である。付言すれば，「認識の対象」あるいは科学的対象の概念の理解なしには，「人間」諸科学の考古学を論述するフーコーの著作の一冊たりとも決して読むことはできないであろう。し

たがってわれわれとしては，認識論上の基礎的な諸理解をまず確認するところから始めたい。

すでに述べたように，第三の問題は第二のそれとは「まったく異なる問題」である。「認識の対象が実在的対象の認識上の領有を生産するメカニズムの問題をわれわれが提起するとき，われわれは認識の生産の諸条件についての問題とまったく異なる問題を提起しているのである。……認識の歴史についての理論，あるいは理論的実践の歴史についての理論は，人間の認識が，まず最初はイデオロギーの形態で，次いで科学の形態で，どのようにして生産されるかをわれわれに理解させる。……その歴史は，われわれに認識の生産のメカニズムを十分知的に理解させてくれるが，……その考察された認識が，それを認識として操作する人にとって，自らの思考された対象を介して実在的対象を認識的に領有するという機能を達成するメカニズムを知的に理解させてはくれない。」[5] 差し当りそれら二つの問題系の区別の重要性を力説しておきたい。しかし，後に述べるように，両者の相互連関はさらに重要な問題編成にわれわれを導くはずである。

まず最初に，ここで前提となる認識論的差異について簡単に確認しておこう。アルチュセールは，『経済学批判序説』における，方法に関するマルクスの有名な叙述を注解するのであるが，ここではもっと分かりやすい一般的な例を挙げることもできるであろう。たとえば一つの「ライデン瓶」，あるいは一つのコンデンサーを見てみよう。色も臭いも重さもある知覚経験の対象としてのそのコンデンサー。それは実在的対象であり，そこにある種の電気現象が知覚される。その電気現象が概念的に把握されるとき，つまり，その電気容量が金属板の表面積，絶縁体の厚さと誘電率などの変数の概念的関連において数学的定式で把握されるとき，もはやあの実在的対象が問題なのではなく，認識の対象がまさに生成しているのである。両対象の認識論的な身分がまったく異なることは明らかである。アルチュセールが「諸ディスクールの理論に関するノート」で1966年に次のように精神分析について言及しているときも，別のことを述べているわけではない。「それ〔無意識の理論〕を理論〔科学〕として特徴づけているものは，どんな理論をも一つの理論となすところのものと同じである。すなわち，対象としてかれこれの実在的対象ではなくて認識の対象（それゆえ理論的対象）をもち，諸効果の（特定の）可能性の認識，したがってそうした対象の，その実在的な存在諸形態における可能な諸効果の認識を生産することである。」[6] アルチュセールの認識論的差異の概念が，そうした一般的な認識論的事実を確認していることは明らかであり，そこには何も理論的に「無謀」なものはない。

むしろ注意を促しておかねばならないことは，アルチュセールへのバシュラールの影響が話題になるとき，「認識論的断絶」や「認識論的障害」の概念のみが力説されるが，その影響は両概念にとどまるものではないということである。アルチュセールのいう「認識論的差異」もまたバシュラールの基本的な主張にほかならない。バシュラールこそ「通常の認識」と「科学的認識」の「認識論的不連続性」すなわち「断絶」における「科学的」対象の種別的差異を最も力説した哲学者にほかならない。[7] もっともバシュラールの「影響」ということでわれわれは，アルチュセールの理論がバシュラールにすでに先在していると言っているわけではない。バシュラールは

物理学と化学の領域で哲学しているのにたいして，アルチュセールはマルクスの創設した「歴史の科学」の認識論的領域を活動分野にしているのである。バシュラール自身が「領域的理性主義」の概念によってそうした安易な越境を戒めていた。アルチュセールはバシュラールのテーゼをマルクスのなかに認める同時に，その含意するところを歴史の科学いう特異な領域で種別的な理論を全面的に展開しているのであって，その理論はバシュラールに遡及的に還元できるものではなく，新たな多くの課題を含むものであった。

バシュラールにとってもアルチュセールにとっても，科学的対象を介しての実在的対象の認識的領有のメカニズムに関する上述の第三の問題系において問題なのは，「認識の哲学」にとっての問題であった「保証（garantie)」についての問い，たとえば客観的認識を保証するア・プリオリな可能性の条件に関する問いではなく，また換言すれば認識する意識的「主体」と「客体」の一致に関する古典的な問いでもない。ここには認識論的問題編成のまったくあらたな位置移動があり，哲学的革命がある。もはや認識活動に外的な保証の基準，上級の哲学的法廷に提出される認識論的基準が問題なのではない。そのうえ，アルチュセールはマルクス主義者にお馴染みの「実践の基準」をしりぞける。[8] なぜなら，アルチュセールはその基準をプラグマティズム的な実践的成功という同じ「保証」のイデオロギーに属するものと解するからである。主体と客体の一致に関する古典的観念論の法的保証にたいして，プラグマティズムの事実上の保証である。

一方では，周知のようにアルチュセールは，「生産」としての「実践」概念の多様性を主張する（経済的実践，政治的実践，イデオロギー的実践，技術的実践，科学的あるいは理論的実践，等々)。そのうえで彼はこう述べている。「……理論的実践はまさに自己自身にたいして自らの固有な基準であり，己れの生産物の質に関する有効性認証の確定した規約集，すなわち科学的実践による生産物の科学性の諸基準を，まさに自らのうちに含んでいる。……ひとたび諸科学が真に構成され展開されるや，それらが生産する認識を『真理』であると，すなわち認識であると宣言するために，外的な諸実践の検証を必要としない。……諸科学それ自体がその認識の妥当性の基準を提供する――その基準は当該の科学的実践の行使の厳密な諸形態とまったく一致している。われわれは『実験的』諸科学についても同じことが言えるのであって，それらの理論の基準は，その理論的実践の形態を構成するその実験なのである。」[9] ここで「実験」が理論構成の内在的契機として把握されており，「仮説」を事後にただ「検証」するものではないことに，注意を促しておこう。

アルチュセールはかくて史的唯物論についても同じであると宣言する。「……マルクスの理論的実践によって生産された認識の『真理』の基準は，彼の理論的実践そのものにおいて，すなわちその論証的な価値によって，その認識の生産を確かなものにした諸形態の科学性という資格によって与えられる。マルクスによって生産された認識の『真理』の基準は，マルクスの理論的実践である。」[10] もちろん，アルチュセールによればその理論的実践は，マルクスの体験したさまざまな経験における新たな思考対象の内在的な介入を排除するものではない。以上の事態は，アル

チュセールによれば，科学的実践への実践基準の内在性，というテーゼで要約される。

しかしそのテーゼは，認識の対象を介しての実在的対象の認識的領有のメカニズムについて理論化しているのでなく，むしろその理論化に代置されるイデオロギー的な答えを排除しているにすぎない。理論的な課題は手つかずのままに残っている。換言すれば，「マルクスの理論は，それが『真理』であったがゆえに成功裡に適用されえたのであって，成功裡に適用されたがゆえに真理であるのではない」という，プラグマティズム的基準に対する常用の，しかも正しい批判のうちに含まれる「適用可能性」の理論内在的なメカニズムの問題は解かれていないのである。すなわち，科学的認識を認識として固有に構成しているところのもの，すなわちアルチュセールの言う「認識の効果」の内在的メカニズムの問題は提起されてはいるが，理論的になお答えられていない。イデオロギーの効果を授ける特性（鏡像的関連内での再認－誤認の効果）とは区別されるところの，認識にその固有な特性を授ける科学性の種別的諸形態とはいかなるものなのか。

アルチュセールは，その問題解決の方向を，科学的「言説」の体系的な種別的差異のなかに探究しようとしている。彼はそのように示唆して『資本論を読む』序文ではその問題を宙吊り状態のままに残す。「したがって，われわれは唯一の同じ問いの円環から脱出していない。……その円環はイデオロギーの閉じた円環ではなくて，その囲いそのものによって永久に開かれた円環，基礎づけられた認識の円環である。」[11] アルチュセールは，これまで論じてきた問題系を，科学的言説のエクリチュールの形態についての開かれた問いとして宙吊りにしたが，『資本論を読む』の第二論文「『資本論』の対象」においてその問題がどのように論究されているかを見てみよう。第二論文は，マルクスの理論的言説のうちにその科学性の種別的形態を解明するために企てられたものであって，まさにマルクスにおける認識的対象と実在的対象の差異と関連をその論究対象としているものなのである。

2　アルチュセールによる『資本論』の科学的「対象」規定

第二論文のその表題は，もちろん『資本論』の「科学的」対象の形成を意味している。その対象の形成は同時に「科学的」理論の形成にほかならず，周知のように，その形成は「認識論的切断」によってはじめて可能になった。その理論形成に「実践の状態で」内在するマルクスの「哲学」を顕在化し理論的に定式化することが，アルチュセールの差し当りの哲学的課題であった。バシュラール流に言えば，それは，ある一定の認識的領野における「科学的活動」に内在する「哲学素」あるいは「哲学的要素」を剔出し，また同時にその中心軸から逸脱している「哲学者」の遅れたもろもろの思想を批判することである。

すでに周知のように，アルチュセールの結論によれば，『資本論』の科学的対象は「政治経済学」ではなく，「歴史の科学」を構成する認識的対象である。「政治経済学批判」とは，その経済学に新たな問題編成と新たな対象（歴史の科学）を対置することによって，その経済学の対象そのもの，すなわちその存在そのものを疑問に付することを意味する。

ところで，アルチュセールの考えによれば，政治経済学の対象の構造は，所与の諸経済的現象の同質的領野についての実証的理解と，《homo œconomicus》のイデオロギー的人間学によって規定されており，マルクスはその構造を拒絶したのである。[12] 第一の構造的契機は，「同質的領野であるというその特性を所有しているある限定された領野の内部に配分される『経済的』事実と現象の現存」を直接的確実性の所与とみなす。われわれは，括弧に入れられた「経済的」というアルチュセールの表現のうちに，「道徳的」事実は存在せず，道徳的解釈のみがある，というニーチェの箴言を思い出すべきである。そのうえ，その「経済的」事実は「同質的領野」をうちに含む。「その同質的領野はある限定された空間であって，経済的な事実とか現象といったそのさまざまな規定性は，それらの存在領野の同質性によって，比較可能であり，きわめて精確に測定可能であり，それゆえ量化可能である。」[13] 第二の構造的契機は，生産し，分配し，消費する人間主体とその「欲求」を所与として想定する素朴な人間学である。「それゆえ，〈政治経済学〉の固有の理論的構造は，所与の現象の同質空間と，欲求の主体としての人間（ホモ・エコノミクスという所与）のうちでその空間の現象の経済的性格を基礎づけるイデオロギー的人間学とを，無媒介的かつ直接的に関係づけることにある。」[14]

マンクスはその政治経済学の理論的構造をしりぞけることになるのであるが，アルチュセールはその拒絶の理論的含意を，消費，分配，生産の各分野にしたがって素描している。その際「生産」は労働過程と生産諸関係という二つの項目に分けられて分析されている。まず「労働過程」の物質的諸条件の再生産を理論的に構成する諸契機は，経済的に「操作的な（opératoire）」概念（不変資本，可変資本，〈第一部門〉，〈第二部門〉）として，古典的政治経済学に対する批判を介して再構成される。アルチュセールによれば，「そのとき，その対象の概念は，直接的に『操作的な』経済的諸概念という形態のもとでそのまま存在している。」[15] 労働過程の三つの構成要素のうち労働手段は，その労働過程の歴史的形態を規定するがゆえに優位の位置を占めるが，したがってまた生産様式を決定づけることになるが，生産労働の生産性の度合いが問題になるかぎりは経済的に「操作的な」概念にほかならない。しかし他方では，生産様式という概念は，生産過程の社会的関係である「生産諸関係」の概念に導かれる。

生産諸関係は人間の相互主体的関係だけではなく生産の物質的諸条件を含むが，問題はその生産過程の諸要素およびその物質的諸条件の「結合（Verbindung, combinaison）」の仕方の諸形態であり，すなわち生産様式である。「というのは，マルクス主義的歴史概念はそうした『結合』の形態の変異の原理に立脚しているからである。」[16] さらに，たとえば政治的「形成体」の必要性と形態がその根拠を置いているのは，生産の担い手と生産手段との結び付きを構成する《Verbindung》の水準においてであると同時に，「ある種の生産関係はそれ自体の存在の条件として，法的－政治的およびイデオロギー的な上部構造の存在を前提していること，またなぜその上部構造が必然的に種別的であるか」[17] が明らかになるのである。したがって，生産諸関係は，他の諸水準におけるそれ自体の種別的存在条件を考慮しなければ，その概念を把握しえないことになる。こ

こにアルチュセールが社会的形成体を全体的構造として，すなわち支配的および決定的な要素を含む重層的構造として概念的に把握しなければならなかった理由がある。

以上のことから，アルチュセールは二つの結論を導きだす。第一に，「……経済的なものの直接的な把握はなく，生の経済的な『所与』はなく，あれこれの水準で直接的に『与えられる』効力（efficace）もまたない。……経済的なものの同定はその概念の構築を経てなされるが，その概念が構築されるには，全体の構造のさまざまな水準の種別的な存在と接合・分節とを，それらが必然的に当該の生産様式の構造に組み込まれているがままに定義することが前提になっている。」[18] すなわち，ニーチェ的に言えば，「経済的」な事実は直接的な所与ではなく，一つの「解釈」なのである。換言すれば，経済学の対象は，同質的領野における「経済的」な現象とか事実といった直接的な所与ではなく，予めの理論構成的な「裁断」が必要なのである。第二の結論は，生産諸関係が社会的全体の構造に記入されている領域的構造であるかぎり，生産の担い手はその構造によって規定される位置と機能を果たす《Träger》あって，そのことは経済的な人間主体にかかわるイデオロギー的人間学の排除を意味することになる。

以上の結論は，マルクスの理論が「歴史の科学」という対象の概念的形成であるという新たな意味を獲得する。換言すれば，『資本論』の「対象」とは経済学の対象ではなく，「歴史の科学」の対象なのである。マルクスにおける前代未聞のまったく新たな「科学的対象」の概念的生成。それがマルクスにおける「認識論的切断」である。「生産の概念を思考することは，その諸条件の統一，すなわち生産様式という概念を思考することである。生産様式を思考することは，生産の物質的諸条件のみならず，その社会的諸条件をも思考することである。」ここでは経済的に「操作的な」諸概念をそのようなものとして制御する概念的な水準が問題になると言えよう。マルクスにおいては，経済的諸概念を資本主義的生産様式において規定する概念，すなわち剰余価値の概念が剔出された。したがって，アルチュセールによれば剰余価値がそれ自体としては測定可能な概念ではなく，その効果においてのみ測定可能な存在の概念であるのは，剰余価値の概念が，「生産過程の担い手と生産手段とのあいだに存在する生産関係，すなわちその過程をその発展と存在の全体において支配している構造そのもの」[19] であるというその性質そのものに立脚している。

以上のことから結果する認識論的帰結を，アルチュセールは次のようにまとめている。まず第一に，経済的なものの概念はそれぞれの生産様式にたいして構築されなければならず，換言すれば経済の「対象」は「歴史理論の従属的な一領域」として概念的に構築されなければならない。第二に，経済的現象の場は同質的な無限な平面ではない以上，「数理的形式化は概念的形式化に従属せざるをえない。」第三に，その概念的形式化は，複合的全体の構造による決定という社会的形成体の新たな理論を要請する。[20]

まさにこの第三の理論的問題こそアルチュセールの拓いた新たな哲学的問題編成にほかならず，マルクスの理論的実践に含まれる「新たな合理性の哲学的生産」の顕在的定式化のための努力にほかならない。その努力が，全体の複合的構造の概念，フロイトから借用された重層的決定

の概念の拡張，さらには構造論的因果性の概念によって集約されることは，周知の通りである。問題は社会的な全体構造の「科学的」規定にあり，その場合の科学性の意味を明示的に定式化することである。

3　科学的対象を介しての実在的対象の認識的領有という適用理性主義的問題編成

アルチュセールの結論によれば，歴史の科学的対象の概念形成なしには，歴史の現実はもちろん経済的現実の認識的領有は不可能であるが，そのことは「西欧批判哲学の観念論的－経験論的伝統」と袂をわかつことを必要とするものではあっても，「実効的な科学的実践」[21]と手を切るわけではない。私見によれば，科学的認識の「実効的effectif」な特性を歴史の領域における哲学的反省として徹底的に追究したことこそ，アルチュセール哲学の最大の貢献なのである。

ヘーゲルの全体性と弁証法の概念に対するアルチュセールの有名な批判によれば，一つの内在的本質の，多としてのその外在的現象への表現としての全体性の概念と，矛盾を介してのその本質の実現と止揚というヘーゲル流の弁証法は，構造的には「単純」であり，マルクス理論における「複合的」な全体的構造と不均等的な重層的矛盾の概念とは本質的に異なる。[22] したがって，ヘーゲル弁証法のマルクスによる「転倒」に関するアルチュセールの解釈は，「……いかなる概念によって，あるいは諸概念のいかなる総体によって，ある構造の諸要素の規定と，それら諸要素間の存在する構造論的諸関係を，またその構造の効力（efficace）によるそれら諸関係のすべての結果〔効果 effets〕を思考しうるのか。……換言すれば，構造論的因果性の概念をいかにして定義するのか」[23] という問いと課題を含むのである。本質／現象という対概念を機能させることはもはや問題ではなく，構造論的因果性の概念を規定することが課題になる。因果性の概念はすでに科学史のなかで多様な意味を担っているが，[24] ここでは全体的構造によるその諸要素に対する効力とその効果の重層的決定，構造のその効果における内在性，等々の概念によって，具体的な歴史的諸状況をその特異性において，その特異な力動性において認識することが問題なのである。

ところで，アルチュセールにおいてその構造論的因果性の概念が『資本論』の内在的考察そのものとしては十分深化され展開されているとは言いがたく，その理論的な課題は実は空白のまま残されている。[25] それゆえ既述した認識的領有のメカニズムの解明は，アルチュセールの意図にもかかわらず，理論的な精確さをもって十分達成されていない。その場合なおここで言及すべきことは，重層的決定などの概念によってアルチュセールが示した認識論的ヴェクトルがいかなる方向に定位されているかを明確しておくことである。

構造化された諸水準のあいだに存在する効力の階層性・度合い・指標，諸水準の従属の形態と程度，水準間における相互の差異的時間性（ずれ，遅れ，残存，発展の不均等），決定因子指標と効力指標，等々の概念を駆使して，アルチュセールは重層的決定の概念を構築しようとする。何

のためにか。より深くより精確に，認識の対象の構成を介して実在的対象を概念的に領有するためである。重層的決定の概念の理論的機能は，数量的および非数量的な概念によって構成される複合構造的な「差異化空間」の設立，科学的対象を構成する諸要素とその諸関係・諸矛盾の概念を特異的に現実に適用－実現する「個体化操作子」の確定，等々の規定化を含んでおり，換言すれば，その対象を構成する諸概念はそれ自体のうちにその実践的適用の可能性の条件を接合していなければならない。[26] アルチュセールによれば，たとえばフロイトの抽象的概念とその理論が科学的なのは，「その具体的諸対象それ自体に対する一切の実践的，技術的適用の可能性の条件」を与えるからであり，科学的対象それ自体のうちに「具体的なものとのそれ自身の適用関係」を含んでいるからである。[27]「概念の適用諸条件をその概念の意味そのものに合体すること」こそバシュラールの適用理性主義の定義なのであるから，われわれはアルチュセール哲学の適用理性主義について語りうるのであり，マルクスのうちに彼が剔出した哲学素，「新しい形態の合理性」とは，構造論的複合としての社会形成体の歴史に関する科学的概念形成を賦活している適用理性主義にほかならず，科学的対象の概念化による実在的対象の認識的領有とは，歴史の科学の場合まさにそうした構造論的複合の理論的概念化によって達成されるのである。諸矛盾は諸水準のあいだのその構造的な「位置」に従って構造の変数として把握されることによって，「構造化された複合の具体的な変更と変異」が理論的－実践的に理解される。そのような適用理性主義的な理論的実践こそ，科学的実践への実践基準の内在性という，既述したアルチュセールのテーゼで主張されていたものにほかならないのである。

認識の「深化」という概念を強調しておこう。適用理性主義という哲学的規定は科学的認識の近似性を含意しており，認識の生産過程において実際に活動している哲学素を指示している。「その実在的対象の認識の深化は，認識の対象に必然的に作用する理論的変換の労働によって実現される」のであって，「認識の対象の絶えざる手直しによる実在の対象の認識の絶えざる深化というテーマ」[28] こそ，アルチュセールが正しくバシュラール認識論から継承し，マルクスやレーニンの仕事のなかに読み取っている認識論的テーマなのである。バシュラールの「認識論的障害」や「認識論的断絶」の概念も，「認識の絶えざる深化」という認識論的テーマを理論的に追究する過程ではじめて哲学的な意味をもちうることを，忘れるべきではない。その場合，科学的認識の生産の歴史についての〈理論〉もまた，認識の絶えざる深化の過程についての理論として把握されなければならないのではないか。以下，アルチュセールがその過程の理論をいかに把握しているかを見てみよう。

4　科学的認識の生産過程の論理

アルチュセールは，一般に実践という概念を一定の生産手段によって一定の素材をある一定の生産物に変化させる過程として捉え，認識生産の理論的実践もその図式に従って理解している。それゆえ，認識生産を理論的という実践の種別的差異において把握することが問題になるので

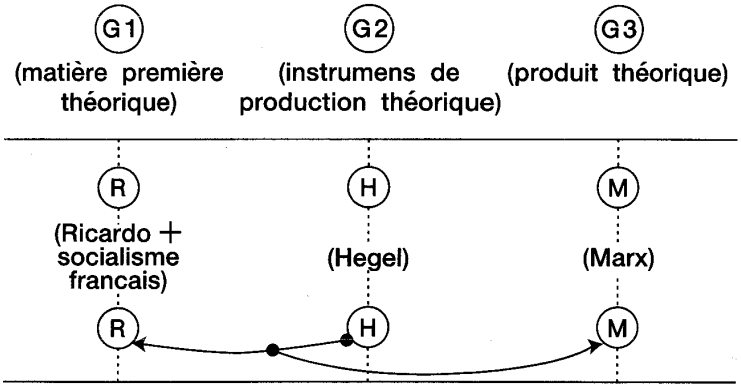
あって，その主要な考察対象は歴史の科学の形成というマルクスの科学的発見－理論的革命と，マルクスやレーニンの政治的実践のうちに探究されることになる。認識生産の最初の素材－原料は「一般性Ｉ」（以下Ｇ１）と呼ばれる。その最初の一般性が理論的実践によって加工され，マルクスの言う概念的な「具体性」としての科学的認識である「一般性Ⅲ」（以下Ｇ３）が生産されることになる。すでに述べたように，Ｇ１はいわゆる直接的な事実的所与ではなく，いつもすでにイデオロギー的諸観念や科学の前段階に属する諸概念（前－一般性Ⅲ）である。[29] したがって，Ｇ１からＧ３への変換は，理論的な基盤の転換を含む「認識論的切断」あるいは変異（mutation）の場合もあるし，そうではない改鋳（refonte）の場合もある。そして，Ｇ１を加工してＧ３に変換する際の媒介となる生産手段が「一般性Ⅱ」（以下Ｇ２）であり，問題はそのＧ２をいかに規定するかである。

アルチュセールによれば，Ｇ２は「一群の概念によって構成されているが，それらの概念の多かれ少かれ矛盾した統一体が当該の（歴史的な）時期における科学の『理論』を構成しているのであり，すなわちその『理論』がその科学のいかなる『問題』もそこで必然的に提起されることになる領野を限定している（換言すれば，そうした『理論』において，その科学が自らの対象において，『事実』とその『理論』との対決において，その古い『認識』とその『理論』との，あるいはその『理論』とその新しい認識との対決において出会う『難題』が，その領野によって，またその領野のなかで，問題という形式で提起されることになる）。」[30] それは諸難題が理論的な「問題」として形成される「理論的―技術的諸装置」の全体であり，すなわちアルチュセールの力説する新たな「問題編成（problématique）」の形成が出現する複合的で矛盾した理論的領野である。新たな科学的対象の形成においては，新たな問題編成の形成，その地盤全体と地平全体の転換が伴う。しかし，1963年の論文「唯物論的弁証法について」では，アルチュセール自身が後に述べるように，「きわめて一般的な図式」しか叙述されず，Ｇ２に関する理論的展開はそれ以上なされていない。

アルチュセールは認識を生産とみなし，その展開過程を生産労働の図式に従って解釈する。彼がＧ１とＧ３の質的な不連続性を強調し，ヘーゲル的な「単純な」展開の弁証法をしりぞけるのは正しい。それはヘーゲル的な表出過程ではなく生産過程なのだから。しかしアルチュセールは，ヘーゲル的弁証法や経験主義的イデオロギーに対する批判を絶えず詳述することはできても，1963年のその論文ではＧ２の内容に関して理論的に展開できていない。認識生産の歴史についてのアルチュセールの理論は，そもそもその問題設定自体において両義的な規定あるいは意図をすでに懐胎していたのではないか。なぜなら，認識生産の歴史的諸条件についての事実的記述は，既述したところの「認識の絶えざる深化」の過程の理論と同一とはみなされえないからである。その生産過程が認識の深化として，その種別的な差異において把握されるためには，単なる事実的な歴史的諸条件ではなく「認識的領有」の深化の形態に関する洞察が必要なのである。

アルチュセールは５年後にマルクスの「三源泉」に準拠してマルクス－ヘーゲル関係を論じな

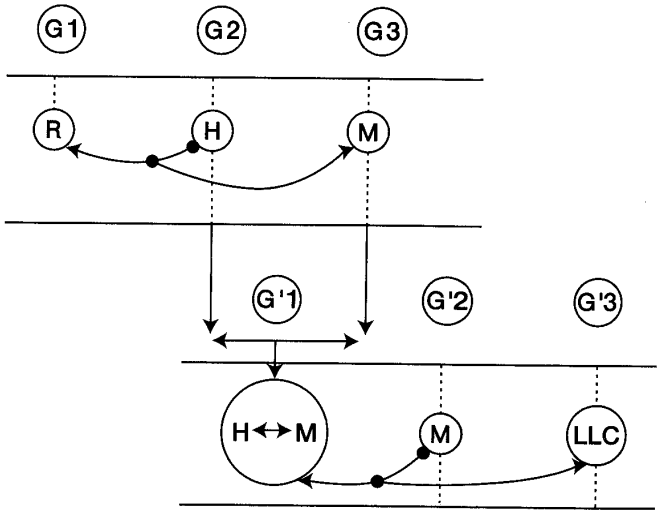
Schéma I



がら，「理論的実践の過程」という同じ問題について再論している。アルチュセールはドイツ古典哲学とイギリス政治経済学をそれぞれヘーゲルとリカードで代表させた上で，図式Ｉで三源泉の理論的生産関係を例示している。その意味するところは，マルクスの理論的生産物が，リカード（イギリス政治経済学）＋フランス社会主義〔マルクスの理論的実践の原材料〕に対するヘーゲル弁証法〔ドイツ哲学，つまり理論的生産道具〕の作業の所産であるということである。図式におけるヘーゲルからリカードへの矢印は，ヘーゲル弁証法のリカードへの適用ではない。それはマルクスにおけるヘーゲル弁証法の「転倒」にかかわる周知の問題である。マルクスの弁証法はヘーゲル弁証法とは質的に異なる。「……ヘーゲル弁証法は，それがリカードに対して実行した理論的作業のなかで変形された。理論的原材料を変形する理論的作業の道具はそれ自体その変形作業によって変形される。その成果は『資本論』のなかで働いている弁証法であり，その弁証法はもはやヘーゲル的弁証法ではなく，まったく別の弁証法である。」[31)]

次いでアルチュセールは，その『資本論を読む』で彼が試みたことを次の図式Ⅱで指標として例示している（LLCの略記号は《*Lire le Capital*》を示す）。第二サイクルにおいて原材料は「マルクス－ヘーゲル関係」（G'1）になっている。アルチュセールはそのG'1に対して，成果である『資本論を読む』（G'3）を生産するために理論的生産手段である「マルクス自身といくつかの他のカテゴリー」（G'2）を作用させたことになる。第三のサイクルがどのように開始されるかは容易に想像できるであろう。ただしアルチュセールは次のような注釈を忘れてはいない。「経験が直ちに教えるところによれば，その内部のサイクルにとどまることはできないのであって，前進するためには階級闘争の経験を経なければならない。」[32)] その図式Ⅱで特徴的なことは，新たな「経験」から得ら

Schéma II



れた「他のカテゴリー」がたえず付け加わるとしても，第二サイクル以降まさに〈マルクス〉がＧ２の位置を占め続け，それとの関連で新たなＧ１とＧ３が生産されていくということである。マルクスによって創設された「歴史の大陸（continent Histoire)」では以後「地盤の変化」は生じないどころか，一切はマルクスの理論的地平のうちにとどまることになろう。

アルチュセールはＧ２を生産の「手段」または「道具」として把握しており，図式Ｉにおいても生産活動において「加工－変形された」弁証法という「方法」であることが明らかである。その場合，理論的生産過程における諸要素のあいだの論理的関連がその内在的必然性において明確に把握されないのもまた明らかである。なぜなら，Ｇ１とＧ２のあいだに相互移行の内在的な理論的連関の問題は提起されえないからである。しかしながら，図式Ⅱにおける第二サイクル以降ではその欠陥は消滅する。自明なことであるが，たえず〈マルクス〉がＧ２の位置を占めている以上，その新たな生産の論理的関連は容易に理解されうるからである。第二サイクルの読み方はまさに『資本論を読む』のそれであるから，すでにそれはその著作で主張されていたことでもある。「……『資本論』の哲学的な読み方は，われわれの研究対象であるマルクスの哲学の適用としてのみ可能である。……問題は，潜在しているものを顕在化するということを意味するように思われるその言葉〔produire〕の厳密な意味で，生産することである。……そうした生産は，生産作業に円環という必然的な形態を与えるという二重の意味で，認識の生産である。」[33] さらにアルチュセールは『資本論』の「真に批判的な読み方」について次のように述べている。その読み方は「われわれが『資本論』のなかに探求するそのマルクス主義哲学の諸原理そのものをマルクスのテクストに適用するものである。われわれはマルクス主義哲学をその適用そのものから期待しているように見えるがゆえに，その批判的な読み方は一つの円環を構成しているように思われる。……どんな認識『生産』もその過程においてそうした円環を内包している。」[34] まさにそうした「円環」を明示的に図示したものこそ，図式Ⅱにおける第二サイクルのＧ２＝マルクスの位置規定にほかならない。

そのことは確かに「歴史の大陸」の創設者であるマルクスの理論的革命を科学史的に位置づけ，ある意味ではクーン的な新たなパラダイムの創立を証言するものではあるが，しかしまた同時にその「円環」は教条主義的な不毛性を示していないであろうか。なぜなら，アルチュセールの言うように科学史上第二の「物理学の大陸」がガリレイによって拓かれたとすれば，その後なおアリストテレス的自然学の原理を信奉することは「イデオロギー的がらくた」に囚われているということは確かではあるが，同時にガリレイの物理学がその後の理論的生産過程において絶えずＧ２の位置を占め続けなかったこともまた明らかなのであり，永続的な円環は形成されなかった。ガリレイが自分の確立した新科学に無限の未来が拓かれていると考えていたことは確かであるとしても，後の世代が遭遇した諸問題についていかなる予見さえもなしえなかったのである。

以上から，認識生産の歴史に関するアルチュセールの理論のもつ諸困難は明らかであると思う。それは生産労働の図式に拘泥してＧ２を生産の「手段」または「道具」と規定したことによ

る。それはたとえ認識生産の歴史の事実的諸条件の記述となりえたとしても，すでに述べたように，認識生産の真の問題である「認識の深化」の種別的過程，すなわち科学的対象の構成による実在的対象の認識的領有の深化の過程に関する理論たりえない。その過程の論理の定式化についての問題は，アルチュセールのように提起されるべきではなく，科学的認識の発展の論理の問題として設定され，その脈絡のなかで理論的深化の契機となる認識論的段階が規定されなければならなかった。そうした理論的発展の媒介項の問題はバシュラールにおいても不問に付されていた。なぜなら，彼の場合はＧ１からＧ３への「認識論的断絶」があくまで強調されていたからである。それに対してアルチュセールはその媒介理論の問題を提起したにもかかわらず，またその適用理性主義的な科学理解にもかかわらず，真の問題を逸した。その理由は認識生産の歴史についてのアルチュセールの理論のもつそもそもの両義性にあり，認識生産の歴史的諸条件についての記述的理論と，歴史的な理論的実践過程の諸契機についての別の論理的な問題とを，その問題設定において混同していたからであり，両者の問題の区別が明確に把握されずに前者の問いが後者の真に認識論的な問い――アルチュセールでは不在の問い――を覆い隠しているからである。更に言えば，アルチュセールの定式化におけるＧ１とＧ２の関係は必ずしも歴史的移行の関係ではないのであるから，その定式化が，アルチュセールの意図したところの，理論的実践の「過程」についての図式として適切であることさえ，そもそも疑わしいのである。

フーコーの『臨床医学の誕生』を例にとり，その考古学的記述を認識論的に改釈した上で，そこで記述されている臨床医学の発展の論理，いわば「臨床医学の大陸」の創設を含む発展の論理を辿ってみよう。[35] その場合「一般性Ⅰ」は，18世紀の革命期を通じて深められた疾病分類学的臨床医学であり，その認識論的段階を人物で代表させればピネルやカバニスであり，相当する哲学はコンディヤックである。ついで「一般性Ⅱ」はビシャの解剖＝臨床医学的な理論で達成される。ビシャの理論を新たな土台の上で再編成し18世紀的なＧ１を脱構築するのはブルセであり，彼の研究が「一般性Ⅲ」の段階を表わす（フーコーの考古学的次元での考察によれば，「新医学精神」――バシュラールの用語「新科学精神」に倣った言葉――の革命が達成されたのはその偉大な生気論者ビシャにおいてであるとしても，適用理性主義の認識論的次元の観点から見れば理論的革命が本質的次元で実現されるのはブルセにおいてである）。Ｇ１＝18世紀臨床医学からＧ３＝ブルセへの移行は認識論的断絶を示していると言えるが，フーコーがビシャの重要性を力説するのも当然なのであって，なぜならＧ２＝ビシャは臨床医学的認識の深化の重要な一段階を表わしているからである。しかし，ビシャにあっては『諸膜論』で明らかなように器質的な客観的基礎が追究されているとしても，なお18世紀疾病分類学的な「種（espèces）の医学」は廃棄されていず，疾病のいわば実体的把握は臨床医学的諸概念に適用的－示差的に統合されていない。18世紀の現象的な疾病分類学的臨床医学が廃棄され，そうした統合がはじめて可能になるのは，ブルセの「生理学的」な理論においてなのである。

ここで例示した臨床医学の認識生産の図式が，アルチュセールの図式といかに異なっているか

は明らかであろう。Ｇ２＝ビシャは，確かにブルセから見れば生産「道具」かもしれないが，それは認識生産の歴史的諸条件についての事実的な記述であると同時に，臨床医学という同じ領域における認識の一段階をも示しており，すなわち認識の深化の過程における内在的な媒介理論を表わしている。18世紀臨床医学との関連でビシャにおいて顕在化した理論的な矛盾の解決のために，ブルセは問題編成を革新し，理論上の位置移動，すなわち地盤の変更を余儀なくされるのであって，「一般性」の三形態の内在的移行の連関にはいかなる疑問の余地もなく，生産「道具」といった外在的要因は付随的規定でしかない。一方から言えば，認識生産過程における媒介項Ｇ２の必然性は，科学理論形成を，いわゆる理論的あるいは数学的な契機と経験的－実験的な契機という二項によって考えることが，余りにも図式的であることを示している。ここでは詳述しえないが，そのことは認識生産過程において，「概念」レベルの選択・形成という，あるいはその概念が標定する「実体」形成という媒介的契機が介在していることを意味しており，それゆえアルチュセール的な「生産手段」とは別の意味でのＧ２の位置づけが認識論的に要請されるのである。科学理論形成における三契機についての考え方がそれ自体図式的であるとしても，それは適用理性主義的な認識生産の認識論的規定に基礎づけられているのであり，Ｇ２の位置は，媒介的とはいえ，否むしろ媒介的であるがゆえに，理論形成にとって重要な創造的契機をなしているのである。[36)]

5　結論にかえて

アルチュセールは認識の対象と実在的対象の認識論的差異をバシュラールに倣って力説し，認識生産の歴史の理論という問題編成とはまったく異なるものとして，認識の対象の構成を介して実在的対象を認識的に領有するそのメカニズムについて問題を提起した。それが彼の『資本論を読む』を貫徹する問題テーマであった。アルチュセールはその問題を『資本論』の認識の対象（歴史の科学）の概念的構築の過程と成果において解明しようとした。科学的対象の構成を介して抽象的諸概念の無限に開かれた「大陸」を構築するのは，歴史の経験的実践をより精確にかつより強力に把握するためである。私見によれば，歴史の科学における構造論的複合の重層的決定に関する概念形成は，哲学的規定として見ればバシュラール的な適用理性主義の理論的拡張として理解しうるものである。本論では，西欧の伝統的哲学イデオロギーに対するアルチュセールの批判の豊かさに言及することはできなかったが，重層的決定などの概念で示される彼の理論的努力の適用理性主義的な認識論的ヴェクトルは十分明らかにしたつもりである。そうした認識論的ヴェクトルが指示するアルチュセール理論の基本的投企が明らかにされない以上，アルチュセール解釈はたえず迷宮に迷い込むほかない。

その認識論的ヴェクトルは，他方では認識生産の歴史に関するアルチュセールの理論の限界を定義することになった。生産労働の図式に従ったその理論は，認識発展の理論とはまったく異なる。認識の発展過程のなかに生産「道具」の観念を導入することは，その発展過程の内在的必然

性を明らかにするためには不適切であったと言うほかない。適用理性主義的な認識の深化の過程を論理的に解明するのは認識発展の理論なのであって，アルチュセールの定式化はそうした深化の理論的構造を暗にめざしつつも，その理論的構造を原理的に把握しえない別の両義的な問題群を設定してしまったのである。

アルチュセールは，「理論的実践の諸条件」のもつ特定の精神的―物質的なシステムを力説し，その実践が「原料」を提供する経済的，政治的，イデオロギー的諸実践に基礎づけられ接合されていることに注意を促し，理論的思考がその存在と実践の諸条件によって規定された種別的な実践システムであることを明らかにしようとした。一般的に言えば，確かに科学的認識の活動が経済的，政治的，イデオロギー的諸条件に依存していることは明らかであるが，それらの条件は科学的認識における概念形成の在り方や理論の形態を規定するものではないのである。ところで，明らかに本論の理論的展開をより明確にするためには，更にイデオロギーの問題に言及しなければならなかったが，この小論の紙幅の限界のゆえに十分に触れることができなかったことを，最後に付記しておきたい。

注

1）Balibar E.,《Adieu》, in *Écrits pour Althusser*, La Découverte, 1991, pp.121-122.

2）鈴木一策「アルチュセールの『家出』が物語るもの」,『情況』, 1993年12月号，所収，97-98ページ。我が国へのアルチュセールの受容について言えば，まず第一に今村仁司氏の研究に言及すべきであろう。これまで最も包括的なアルチュセール認識論を展開していると思われる今村仁司の『アルチュセールの思想』(『歴史と認識』の増補再版，講談社学術文庫）は，どちらかといえばアルチュセールの解説・紹介にとどまるとはいえ，我が国のアルチュセール理解の水準を示すものとして一つの目安となろう。しかし，今村氏の労作においても，本論で論じる基本的な認識論主題はただ触れられるだけであるか，あるいはまったく論究されてはいない。

3）Althusser, L., *Lire le Capital*, I, Nouvelle édition, entièrement refondue, François Maspero, 1968, p.74（参照対象はアルチュセールの論文なので，以下テクストとしてはこの改訂第二版を使用する)。

4）以上の坂上氏と柳内氏の引用は,『情況』, 1993年11月号，また鈴木氏の引用は,『情況』, 同年12月号，所収のアルチュセール特集に掲載された各論を参照せよ。

5）Althusser, L., op. cit., pp.74-75

6）Althusser, L., *Écrits sur la psychanalyse*, Éditions STOCK／IMEC, 1993, p.120.

7）特に，バシュラールは次の二箇所で「通常の認識と科学的認識」という同じ表題でこの「断絶」の問題を論じている。Cf. Bachelard, G., *Le rationalisme appliqué*, PUF, 1949, chap. VI. および，*Le matérialisme rationnel*, PUF, 1953, Conclusion.

8）Althusser, L., op. cit., pp.67-70.

9）Ibid., pp. 71-72.

10）Ibid., p.72.

11）Ibid., p.85.『資本論を読む』の《Préface : du *Capital* à la philosophin de Marx》のこの末尾で言及されているアルチュセールの立場は,「さまざまなディスクールの種別的諸効果についての問題」を解明する「一般理論」として，その後もアルチュセールの考察の対象となった。Cf. Althusser.L., Trois notes sur la théorie des discours, in *Écrits sur la psychanalyse*, *STOCK／IMEC*, 1993.

12）Cf. Althusser, L., *Lire le Capital*, *II*, Nouvelle édition, entièrement refondue, Francois Masoero, 1968, L' objet du *Capital* (suite), Ⅶ. L' objet de l' *Economie politque*.

13) Ibid., p.27.
14) Ibid., p.29.
15) Ibid., p.42.
16) Ibid., p.48.
17) Ibid., p.49.
18) Ibid., p.51.
19) Ibid., pp.53-54.
20) Ibid., pp.57-59.
21) Ibid., p.59.
22) 特に次の二つの論文を参照せよ。Althusser, L., Contradiction et surdétermination. in *La Pensée*, n°106, déc. 1962 ; Sur la dialectique matérialiste, in *La Pensée*,n°110, juil.-août 1963. 両論文は，*Pour Marx*, François Maspero, 1965, にまとにまとめられている。
23) Althusser, L., *Lire le Capital*, Ⅱ, op. cit., p.61.
24) 自然科学における原因または因果性の概念の多様性あるいは曖昧さと，科学的法則性の歴史的形態については，たとえば次の書を参照せよ。Cf. Blanché, Robert, *L' induction scientifique et les lois naturelles*, PUF., 1975.
25) その理論的な課題を継承するものとしては，たとえば次の書を参照せよ。Cf. Bidet, Jacques, *Que faire du Capital ?*, Méridiens-Klincksieck, 1985, et *Théorie de la modernité, suivi de Marx et la marché*, PUF., 1990.
26) 差異化空間や個体化操作子の概念を用いてパリアントが行なったバシュラール適用理性主義の非数量的捉え直しについては，私の拙論「人間諸科学における適用理性主義について」，札幌学院大学人文学会紀要，第54号，1993年12月，pp.73-90，参照。
27) Althusser, L., Freud et Lacan, in *Positions*, Editions sociales, 1976, p.30.
28) Althusser, L., *Lire le Capital*, Ⅱ, op. cit., pp.20-21.
29)「前-一般性Ⅲ（ex-Généralité Ⅲ）」の概念は重要である。そのような規定はG１をただ単に関連するイデオロギーとして把握することが不正確であることを意味している。なお，ここで言及しているテクストは，1963年に『パンセ』誌上に発表された論文「唯物論的弁証法について」（後に『マルクスのために』に所収）であり，特にその著名な第３節「理論的実践の過程」である。
30) Althusser, L., *Pour Marx*, François Maspero, 1965, p.188.
31) Althusser, L., Sur le rapport de Marx à Hegel , in D'Hondt, J. (dir.), *Hegel et la pensée moderne*, PUF, 1970, p.96.
32) Ibid., pp.93-94.
33) Althusser, L., *Lire le Capital*, I, op. cit., p.37
34) Ibid., pp.88-89.
35) 杉山吉弘「人間諸科学における適用理性主義について」，前提論文，参照。そこではビシャに関するフーコーの考古学的評価とパリアントの認識論的評価の相違について言及しておいた。付け加えれば，本論文はこの1993年の拙論の続編として，しかもアルチュセールの認識論を対象にして，歴史の科学を含む「人間諸科学のエピステモロジー」を更に深く展開する意図をもって執筆されたものである。
36) 科学理論形成における三契機を力説する立場としては，古くは武谷三男の三段階論があるが，本論の立場は特にその理論に準拠しているわけではない。武谷三男編著『自然科学概論』，第二巻，勁草書房，1960年，参照。しかし，昨年死去した花田圭介氏がこの著作で展開している「科学発展の論理について」等の各論は，いまなお継承すべき啓発的論文であることを特に記しておきたい。また，物理学理論における三契機（実験的，概念的，数学的な契機）を歴史的認識論の立場から論述した次の著作を参照せよ。Cf. Merleau-Ponty, Jacques, *Leçons sur la genèse des Théories Physiques*, Vrin, 1974.

また異なった文脈においてであるが，科学的な歩みにおける創造的な「戦略」，「投企」，「様式（style)」の契

機を強調して，科学的活動の歴史的諸条件の解明とは別の内在的な課題を認識論（エピステモロジー）に認めるG．グランジェの次の論文を参照せよ。Cf. Granger, G., Pour une épistémologie du travail scientifique, in *La philosophie des sciences aujourd'hui* (dir. J. Hamburger), Gauthier-Villars,1986.

（すぎやま　よしひろ　本学人文学部教授　哲学専攻）